

# 北海道東部のチャシ

9月7日(木) 19:00~20:30 東京会場  
9月11日(月) 18:30~20:00 札幌会場

講師 豊原 熙司 文化財サポート有限会社

ただいま紹介をいただきました豊原です。よろしくお願いいたします。

表題は「北海道東部のチャシ」となっていますが、ここでは東部と言っても、釧路・根室管内のチャシに関わる、記録の残っているチャシについてお話したいと思います。

北海道には、「茶志骨(ちゃしこつ)」、「茶志内(ちゃしない)」、「茶志(ちゃし)」などの、漢字で表記された地名が多くあります。漢字表記なので、道外の旅行者などは何と読むのか悩むようです。単なる当て字です。分かってしまえば、どうという事もない当て字です。かつて十勝には、「安骨村」と書いて、「ちゃしこちゃ村」と読んでいた地名もありました。この読み方が、これからお話す「チャシ」です。

チャシを研究対象とする理由ですが、北海道の先史時代の区分の中に、擦文文化と呼ばれる時代があります。この文化の終末については、研究者によつての違いはありますがほぼ13~14世紀と言われています。この擦文文化以後、いわゆる近世アイヌ文化に至るまでが、考古学的に空白となっています。

近世アイヌ文化に関する記述が、文献に出て来るのは17~19世紀なので、この間の数百年が謎となっています。こ

れを解き明かす遺跡として、16~17世紀に盛行したと考えられる「チャシ」が重要な意味をもっているわけです。

チャシとは何か、ということになります。正確には、チャシ・コツ(跡)です。一般的には「砦」とか、「城」とか呼ばれていますが、もともとは、「柵」とか「柵囲い」を意味するアイヌ語です。年配の方は、牧柵のことを「チャツ」と呼んでいますので、チャシから来ている言葉と思われる。

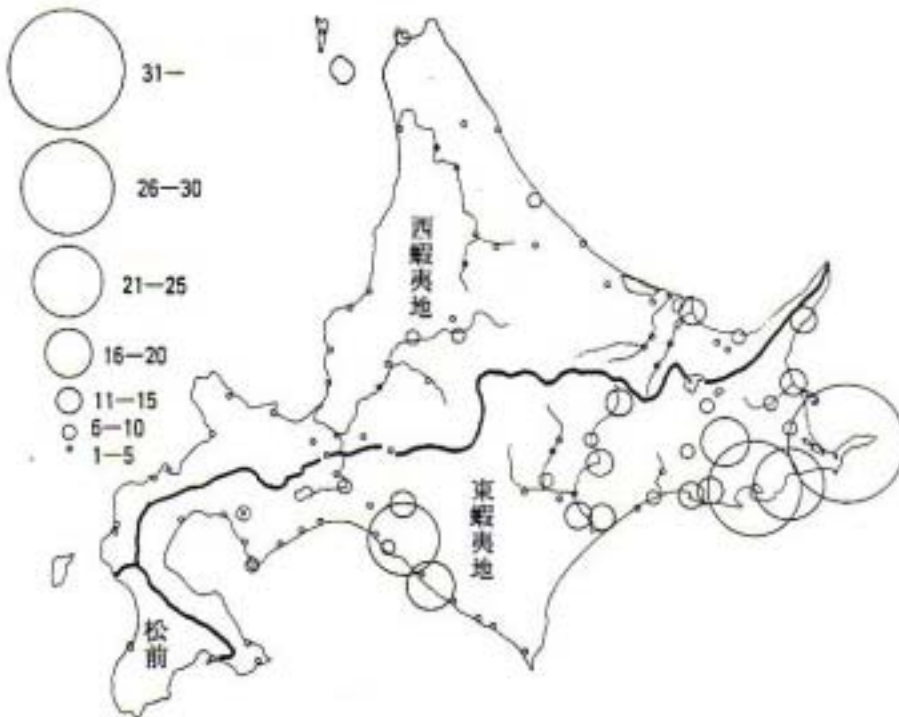
資料1は、道内におけるチャシの分布図です。データが少し古いので、チャシの数はもう少し増えています。東蝦夷地と呼ばれていた東南部に濃密に分布しているのがわかると思います。立地をみると、河川や海、湖沼を臨む丘陵や段丘の端や頂部、あるいは先端部を利用して築造しています。

チャシは道東部においては、竪穴とともに地表面からわかる遺構です。しかも、現在に最も近い時期の遺構でありながら、その成立や性格については明かとはなっていません。

カムチャッカ半島に所在するオストロークや、東北から道南に所在している環濠と形態が似ているので関連を指摘する研究者もいます。また最近では、オホーツク文化(5世紀~12世紀)と係わるという考えもあります。いずれにしても、アイヌ文化の源流を探る上で、チャシは重要な鍵をもっていると言えるかと思っています。

現在までに分かっている機能や性格は、戦闘に係わる「砦」としての防塞的なものより、掘り込まれた壕によって区画された「聖域」とみる考え方もあります。これは、地表面から見て、平坦な地形に壕が浅く掘りこまれていたり、壕の内部が畳2枚ほどの大きさしかないチャシも認められるからです。

このことから戦闘以外に、「祭事の場」、「話し合いの場」、「見張りの場」、あるいは「食料獲得に係わる場」などに使用されたと推測されています。しかし地域や立地、さらには構築された時期の背景によって一律に論じることはできないと思われます。



【資料1 市町村別のチャシ分布(宇田川2001)】

古記録にみられるチャシ

チャシについては、江戸時代の記録がいくつか残されています。もっとも古いのは「津軽一統志」(享保16年・1731)で、これは寛文9年(1669)のシャクシャインの戦いに関するものです。「ちゃし 城のこと」と書かれています。いくつか紹介しておきます。

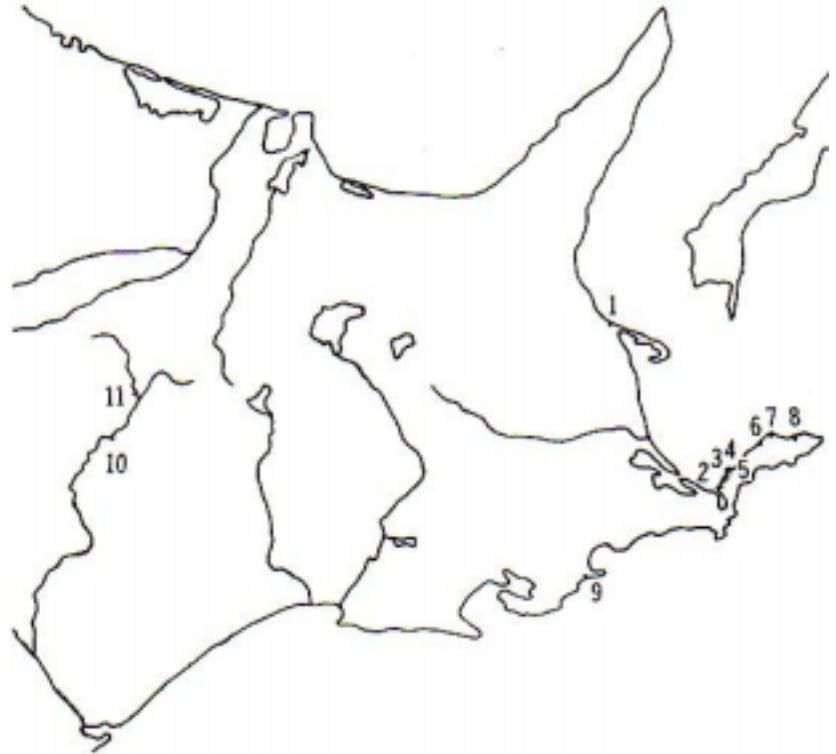
「松前志」(松前広長・天明元年・1781)。「法に背きて財を出さざれば、鬪争に及ぶなり。この時は毒箭を放て鎗を横たへ、戦をなすなり。故に大邑の酋豪なるものは、必ず一郭の高山をチャシと名けて、此によるなり。」

「東遊記」(平秩東作・天明3年・1783)江差に越年し、見聞きしたことを記しています。誇張されていますが、後で述べる釧路のモシリヤのチャシを指していると思われる。「東蝦夷地に大いなるチャシを持ちたる者有。四方険阻にして藤蔓にすがりて出入す。四間に六間の蔵三ヶ所その上にあり。妻は錦を着、羅沙の拾間もあるを敷て居たるをまのあたり・・・」

「渡島筆記」(最上徳内・文化5年・1808)。チャシに拠る、実戦の様子が述べられています。「チャシといふは城のことにて、要害によりて作、櫓をかきあげ中より毒矢を射出す。よする方にては三、四人して小艇を載き、箭をさけて近つ寄、斧にて柱を伐、櫓を倒すことなり。」

また外国の記録ですが、「フリース船隊航海記録」(1643年・寛永20年)があります。東オランダ会社の訓令で、金・銀の探索を目的として航海したカストリカム船隊の船長による記録です。1643年8月15日～9月1日に厚岸湾に停泊しています。「塞は山の頂上に建てられていて、人の丈の1.5倍の高さに造られ、その柵の中には二、三軒の家がある。防禦柵には、大きなカスガイのついた松材の大きな扉があり、これを閉ざす時には太い二本のカヌキをカスガイに通してとめられるのである。これらの方形に造られた防禦柵の二隅には、松材の厚板で造られた足場が建てられているが、それは、その場所から見張りをするためのものであった。さらに、防禦柵はすべて交互する梁で補強されていた。」と書かれています。

(寛政10年・1798)の近藤重蔵による記録は、エトロフ島でのことです。厚岸首長のイコトイが、人を殺したり宝を奪ったりするので、対抗するためにエトロフ島で寛政9年(1797)にチャシを築いた。チャシを造った、最後の記録と思われる。「己に去年中コシヨシアイノ・イクtent・エクニシノと申蝦夷三人頭取チャシと申峯を築き、一揉合仕



造りなおしのチャシ

- |   |                |    |            |
|---|----------------|----|------------|
| 1 | タブ山チャシ         | 8  | コンブウシムイチャシ |
| 2 | チャルコロファイナ2号チャシ | 9  | ピワセチャシ     |
| 3 | ウエンナイチャシ       | 10 | トライチャシ     |
| 4 | ニランケウシ2・3号チャシ  | 11 | ユクエビラチャシ   |
| 5 | アッケシエト1・2号チャシ  |    |            |
| 6 | コタンケシ2号チャシ     |    |            |
| 7 | ノツカマフ2号チャシ     |    |            |

【資料2 造りなおしのチャシ】

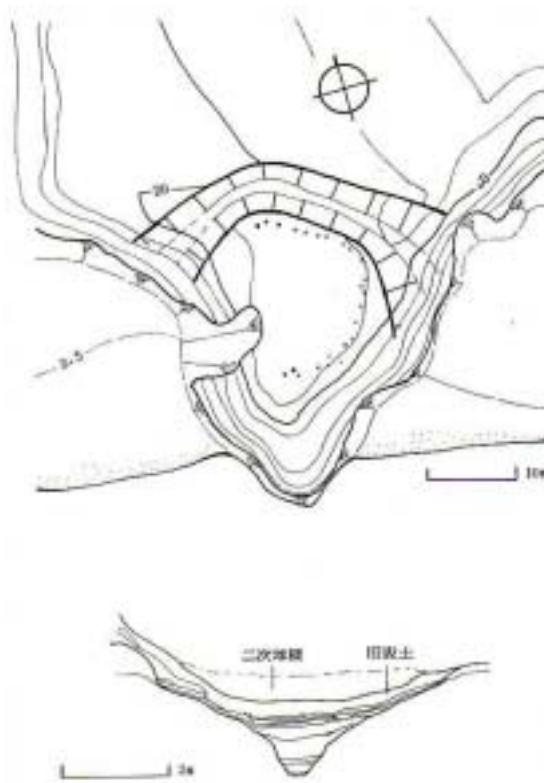
候に申合も有之・・・」

「夷酋列傳附録序」(寛政2年・1790)に、「ノチクサ 此夷人は東部シャモコタン酋長也・・・北島の変によって壘をかまふるところ己に五ヶ所其の當近郷を往来して・・・」と記載されています。ノチクサは、シャモコタン(根室市豊里サンコタン)に居住していた首長であることから、5ヶ所のチャシが造られたというのは、サンコタン周辺のチャシと考えられます。この文書は、「一名毛夷図画国字附録」とも呼ばれています。寛政元年(1789)の、クナシリ・メナシの戦いに関するもので、ここに出てくるチャシは、対松前藩との戦いという目的で構築されています。クナシリ・メナシの戦いとは、場所請負であった飛騨屋が働いていたアイヌの人達への過酷な労働や搾取に対して、アイヌの人達が立ち上がった戦いです。

5ヶ所のチャシが、どのチャシに該当するのかは分かりませんが、複雑な壕が掘り込まれた造りなおしのチャシと考えられています(資料2・3・4)。このような形態のチャシは、根室半島のクナシリ島を臨む根室水道側に集中しているのがわかります。チャシの実測図を見ていただくとわかりますが、複雑な壕が掘り込まれています。おそらく、



【資料3 タブ山チャシ】 【資料4 コンブウシムイチャシ】



【資料5 釧路市フシココタンチャシ（宇田川 1988）】

既にあったチャシを急遽、新たな壕を掘り込んだりして造り直しをしていると思われます。タブ山チャシ(資料3)や、コンブウシムイチャシ(資料4)などは壕が連結しています。さらに内側には、主体部と思われるチャシが造られているのが分かるかと思えます。複雑に掘り込まれたな壕は、壕内での移動と鉄砲を対策と考えられます。

また、「ツキノエ 此夷人は北島クナシリ近辺総部の酋長なり・・数百人の悪賊類を以て相招き既に深山に楯籠り壘(ルイ)を築き隍(クワウ)(カラホリ)を掘り大石を運び鹿砦(カキ)を結び毒箭を製し矛槍を拭ひ」とも書かれていますので、当時、ツキノエはクナシリ島に居住していたことからクナシリ島のどこかにチャシを築いていたことも考えられます。

資料5は、1974年に発掘された釧路市桂恋フシココタン

チャシです。チャシの全面発掘としては最初の例です。海に臨む崖の上に所在し、半円状の壕が1条掘り込まれています。壕の幅は約6~11m、深さは2~3mを測ります。長さ27mの壕が半円状に掘り込まれています。壕の両斜面には、逆茂木状のものが在ったと考えられています。壕の内側には、柵列と考えられる柱跡が、1.5m前後で21ヶ検出されています。もっとも深いのは1mちかくもあります。アカウミガメ、ガラス玉、船釘、大量のシカの骨、陶磁器片が出土しています。注目されたのはアカウミガメで、浅く掘られた土坑に頭部を海に向けた状態で埋葬されています。カメは「海を所有する神」として崇められています。このことから、このカメは霊送りをされたと考えられています。ですから、祭祀をおこなったことが理解できます。18世紀の築造とされています。

このチャシに比定できるかどうか分かりませんが、「東行漫筆」(荒井保恵・文化6年・1809)に桂恋のチャシが記されています。「世はき処にて凡二三十間四方もありて戒りにサキリなど建廻してあり、みな集まりたるときは一間目くらい壱尺程もあけてのこらずサキリを建廻したりといふ。」

資料6・7は、釧路市モシリヤチャシの図です。サルシナイチャシ、ポロチャシとも呼ばれています。地元の人は、モチを重ねたような形状をしているので、「お供え山」と呼んでいます。資料6は、村上島之丞(秦榛麿)の描いたものです。この図の説明ではわかりませんが、「東夷古語・蝦夷紀行」に、「クスリ酋長タシャニシ夷名 チャシの図」と説明があります。このチャシは、「東蝦夷夜話」(大内余庵・安政5・1855)には「クスリにメンカクシ(精一郎の故の名)

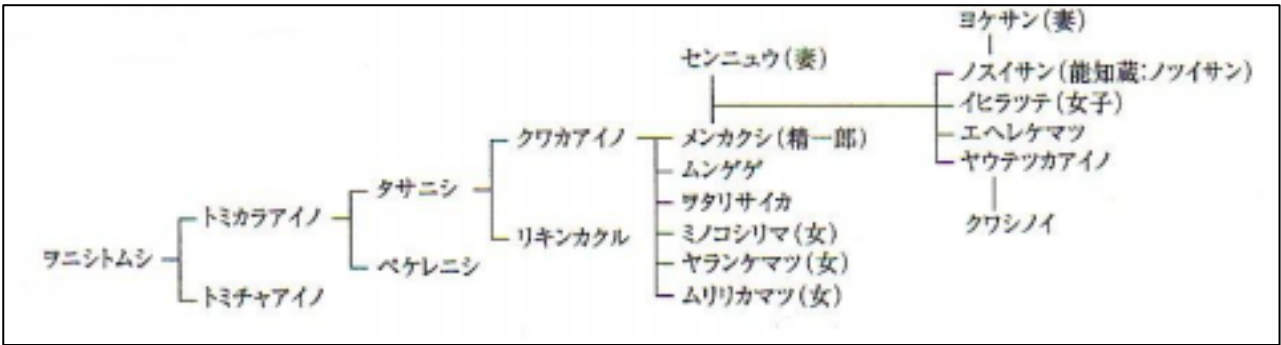


【資料6 チャシ図(村上島之丞・蝦夷島奇観・寛政12年)】



【資料7 東蝦夷夜話(大内余庵・安政5年)】





【資料8 メンカクシの家系】

の館址とて、シャシコツといふ所あり。・・・(中略)・・・頂は平坦にして、僅かに二十歩には過ぎれども、盤旋して登る勢、いかにも砦構なり。麓は濠を二重にめぐらし、その内に一族麾下聚落なしける」に具体的に書かれています。また松浦武四郎の「戊午久須利日誌」(安政5年・1855)に、「凡廿丁位左小山有。其上にチャシコツ有。是を当時メンカクシと云、是乙名メンカクシの先祖の城跡と云り、其形ちに図する如く、山の鼻の方二十間位ツツの櫓跡の如き地形三ツ有」とか、「奴宇之辺津日誌」(安政5年・1855)「チャシコツといえるもの有。巾三丁、長四丁も有。其北面川に向かう処城の砦の形をなす。チャシは城柵の事、コツは地面なり・・・」とか記載されています。

資料8図はモシリアのチャシに係わる、ヨニトムシから続くタサニシの家系図です。いくつかの文献から系譜を辿ったものです。この中で、メンカクシ(精一郎)が文献にはよく出てきます。「寛政蝦夷乱取調日記」(寛政元年(1789)に、「クスリの長人タシャニシ病氣・・・」とありますので、クナシリ・メナシの戦いの時には釧路の首長であることがわかります。

桂恋のチャシでお話した「東行漫筆」には、タシャニシとクナシリのツキノエとの争いが出てきます。「かつらこいの昼休所を出て直に坂を登る。山道になる。此坂の上右之方海岸に出張たるにチャシあり、これは三十ヶ年以前くなしりのツキノエクスリの乙名タシャニシと申ものたかひにあらそいてツキノエのいかたよりたから物をうばひに来るとき急てクスリの夷人タシャニシを大将として弓矢竹槍を持って此チャシに集まりたと云ふ。

タシャニシ一族は、釧路川筋や西別川上流の虹別と密接な関係をもっています。虹別は、摩周湖から流れ出る西別川の上流に位置しています。ここにはポンチャシ(小さいチャシ)が所在しています。西別川は「ヌーシベツ」と呼ばれるほどサケの遡上で有名な川です。一般的には、豊漁の川と解釈されています。

虹別にシュワンと言われる場所があります。ここに最初に居住したのは、メンカクシの叔父となるリキンカクル(シレントクル)です。その他、メ

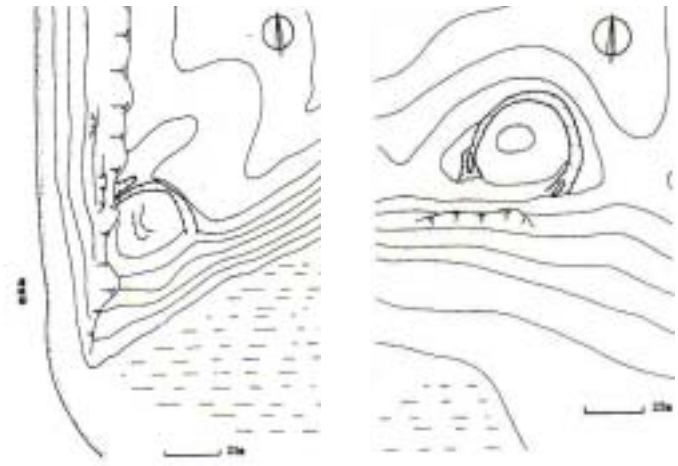
ンカクシの祖先のタサニシが摩周湖でクマを撃った話や、トミカラアイノがニシベツに行って家を作った、タサニシがポンチャシに居住したことなどが文献に出てきます。

釧路川筋にも関連の記載があります。トミチャアイノは、標茶町五十石下流に位置しているフシコケウニチャシに居住していたとか、塘路湖岸に居城していたとされています。

資料9は、釧路湿原国立公園内に所在している塘路湖です。この湖岸に7ヶ所のチャシが確認されています。資料10はコタヌベツチャシ、資料11リーチャシの実測図です。資料9の5、6が該当します。二つのチャシは湖の北岸に



【資料9 釧路湿原国立公園塘路湖】



【資料10 リーチャシ(釧路川流域史研究会1973)】 【資料11 コタヌベツチャシ(釧路川流域史研究会1973)】



【資料12 蝦夷風俗図会附蝦夷語解説全二冊（本田1981）】



【資料13 蝦夷風俗図会附蝦夷語解説全二冊（本田1981）】

所在していますが、壕の掘り込みを見ていただきたいのです。資料10のコタヌベツチャシでは丘陵の、北側で壕が2条、資料11のリーチャシには両側に2本掘り込まれています。湖に向いた方だけが2本で、山側では1本となり連結しています。この沼に東側から流れ込むアレキナイ川の上流をたどると、厚岸湾に流れ込むオボロ川に出ることができます。古くからの、厚岸との交通路です。

塘路湖は、魚類の豊富な沼です。そして、保存のできる食料としての菱の実(ベカンベ)が豊富に採れる湖でもあります。このベカンベをめぐる、いくつかの抗争に係わる伝承も残されています。

このことから、これら二つのチャシは、見られることを目的意識として造られているように捉えることができるかと思われます。堅牢に見えるという、外的効果を期待しています。もちろん、見られることを意識しているのは、交通路としての機能をもっている湖の方向からです。

塘路と厚岸との抗争も伝えられています。想像をたくましくして考えると、厚岸からオボロ川を遡り、アレキナイ川に出て塘路湖に至る交通路を利用して、塘路湖のベカンベなどの食料資源を採りにくるのを防ぐためにチャシを造ったのではないのでしょうか。

資料12・13図、「蝦夷風俗図会附蝦夷語解説全二冊」の絵図です。チャシにまつわる事が書かれています。加賀家は寛政年間から4代にわたり、伝蔵を名乗って根室場所請負人であった藤野嘉兵衛の元で通辞をしていた人です。ここに出てくる伝蔵は、安政年間に野付・標津で活躍した人物です。図は8枚ありますが、2枚だけ載せています。ヲ子コイチャシとチフルチャシとの抗争を描いています。これにはチャシの様子、つまりチャシの周囲に廻らされた柵、壕などや、チャシに抛る戦いの方々に裸の女の人を利用したり、弓矢、棒、石を使用するなどの古記録に残されたものと類似しています。

話の筋は、オンネコイ首長のイリモンクルが、計略で愛人のコイカエマツを裸にして敵のチフルチャシ近くに走らせた。自分のチャシでも内乱があったように見せかけて、家に火を放ち、味方同士が争い、弓矢を持った人達もチャシの柵外に出ている。チフル方はオンネコイ方が弱いとあなどっていたので、女の裸に見とれていて、後ろから不意をつかれ負ける様子が描かれています。

「渡島筆記」に、「女子をして祖して先駆けせしめ、・・・もし女子共に撃て勝つことがあれば傍邑その礼にそむくを悪み・・・」とあります。「祖して」とは、肌脱ぐと意味です。このような形態での、チャシを用いた抗争があったのかもしれない。

以上、北海道東部に残る記録や伝承を基にチャシのお話をしました。雑ばくな内容で、わかりにくかったと思いますが、チャシの概念について的一端はおわかりいただけたかと思います。